

HFHJ Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

第4号 2006年9月発行

レイテ島地滑り被災者のための住宅建設支援チーム「ジャパン・ホープ・ビルダーズ」が帰国

ハビタット・ジャパン初の一般募集型ボランティアチーム「ジャパン・ホープ・ビルダーズ (Japan Hope Builders)」の一行13名がこのほど、フィリピン・レイテ島の地滑り被災地での住宅建設活動を終え、元気に帰国しました。

ジャパン・ホープ・ビルダーズは8月6日から13日までの8日間、フィリピン政府およびハビタット・フィリピンの協力のもと、レイテ島南部のマオパガカイ地区で恒久型スチールフレーム住宅(写真)を建築しました。大きな被害を受けた同地区および隣接するリロアン地区では、年末までに合わせて330世帯分の移住用ハビタット住宅が完成する予定です。



建築が容易なスチールフレーム住宅の骨格と外壁

ことし2月の地滑り発生から半年経った現在も、被災者の多くは避難所などで暮らしています。今回派遣のジャパン・ホープ・ビルダーズは男性7名、女性6名の合計13名の混成ボランティアチーム。年齢層は20歳から60歳までと幅広く、学生から社会人までさまざまなキ

ャリアを持つ人たちが、地元政府から移住地として提供を受けた安全な土地で、現地の被災者やボランティアらとともに建築活動をおこないました。住宅資材調達コストは日本政府の緊急無償資金協力によるものでした。

建築した住宅はハビタット・ニュージーランドが開発したスチールフレーム住宅で、耐震性など優れた強度をそなえながらも、経験のない人でも簡単に建てられることが大きな特徴です。もちろん女性や年配の方も問題なく実際の建築作業に参加し、大きな成果をあげることができました。ハビタットでは今後もレイテ島の一日も早い復興を願って、引き続き支援を行っていく計画です。

参加者の声

松本 俊彦

被災地から約10キロメートル離れたところに雑木林を切り開いて代替の住宅地が造られている。われわれボランティアの宿泊ホテルからバスで5分くらいのところだ。海岸より200メートルくらい離れた高台である。ハビタットをはじめ各支援団体より今後300棟が提供されるという。クリニックや公共施設が並行して建設中であり、現場で必要なブロックなどは現場で地元の人たちが作り、供給しており、多くの作業員が働く活気ある住宅開発地区という風景である。

ボランティアの今回の作業は鉄骨の住宅をフレームの立上げ、屋根を上げるのと、すでにフレームが立ち上がったものに石膏ボードの外壁を取り付けるのが主なものだ。鉄骨



完成した住宅の前で記念撮影

フレームの住宅はハビタット・ニュージーランドが開発した工法だそうで、経済性、安全性、快適性ともよく考えられている。少ない工具で、未熟なボランティアでも経験のあるリーダーの下で作業ができるなど優れた工法と思われる。

フィリピン人の現場リーダーがわれわれボランティアに作業指示してくれる。リーダーは若く今回の工法をよく習得しており安心できる。また現地のボランティア約30名が日替わりで参加してくれていた。われわれボランティアの体力をカバーするには十分であったが、作業内容が荒く、たびたび修復作業が発生した。彼らおよびわれわれボランティアに対する現場リーダーからの作業のコツやポイント、基準などの指導がましかったところである。おおむねリーダーの作業への取り組み意欲は強く、ボランティアとのコミュニケーションは良好であり、お互い気持ちよく4日間の作業ができたと思う。最終日の夕食にリーダーが招待されボランティアと交流できたのも有意義であった。

パキスタン・バラコート地区での住居建設支援事業

ハビタット・ジャパンは、今年5月からジャパン・プラットフォーム(JPF)の助成を受けて、パキスタン地震の最大被災地といわれるマンセーラ県バラコート地区で支援を行ってきました。製材機(のこぎりの刃を高速回転させて木を切る機械)で倒壊した住宅や森林から得られる木材を建築資材にすることで、住宅の再建や補修に役立てる支援活動です。スタッフの移動や製材機の稼働にトラクターが大活躍し、支援の届かない山間部の村々に対しても支援を提供することができました。現地駐在の日本人国際スタッフはハビタット・パキスタンの協力で事業を展開、7月31日をもって第1フェーズを無事終了することができました。

現場では製材機のたび重なる故障やモンスーン(雨季)の到来による土砂崩れなど障害もありましたが、現地スタッフの努力に重ねて被災者や住民の協力もあり、結果としてバラコート地区の6つの村249世帯(1,391人)に支援を提供することができました。多い日には1日で10家族(約60~70人)にもなりました。あるときには、他の村の住民が、「なぜうちの村には来ないのか」とスタッフに訴えてきたことさえありました。

本事業は大規模な支援ではありませんでしたが、「家を建て直したい」「補修したい」という現地住民のニーズに適したものであったため、さらにJPFの助成による3ヵ月の延長が決まりました。9月1日から始まった第2フェーズでは、支援規模を拡大、第1フェーズで得た教訓を活かしながらより効果的な支援を目指します。

パキスタンでは再び厳しい冬が到来します。4月以降、多くのNGOが緊急支援を終えてバラコートを去りましたが、ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは、緊急から復興へと移行しつつある状況が再び緊急へと戻ることのないよう、製材支援を通じて被災者の復興に向けた努力を引き続きサポートします。



ゴールデンウィークGV

GV in the GoldenWeek

予想以上！

ブレット・サールウェッチャー
(北海道JETチーム)

多くの人は、世界中の地域でみんなが力を合わせて住宅を建てているNGO、ハビタット・フォー・ヒューマンティのことを知っている。

2006年4月末から5月にかけて、個人的にこの「仮説」をマレーシアで証明することができた。私が体験したことは、私たちのマレーシア人のガイドがずっと言っていたように、実に「予想以上」のものであった。

溝を掘ったりレンガを横にしたり、家のフレームを塗ったりという数え切れないほどの建築活動の時間のあと、私たちは、好奇心旺盛な目で私たちを見る近所の子供たちと「外国語ゲームデー」を持つという素晴らしい機会に恵まれた。

「頭、肩、膝、足〜♪」と、約15人の子供たちの歌声が始まったのも束の間、50人近くが道に膨れ上がり、私たちは英語で数字、色、動物の名を教え始めた。私たちハビタットのボランティアのほとんどが日本で英語の教師をしており、私たちの家から何千マイル、私たちの母国から数千マイル以上離れたところで、私たちは世界で最も熱心な生徒たちと道の上の教室で自分自身を見つけたのだ。

建築活動の間ずっと、子供たちは必ず挨拶にきてくれた。そして毎日着実に上達した英語で話してくれた。それは以前、数時間だけ習ったものだったろう。子供たちは私たちにバハサ語とメイライ語を教えてくれ、お互いについて遊



び学べる共通語を使って騒いだり笑ったりした。私にとって、その子供たちの表情はハビタット・フォー・ヒューマンティの表情でもある。彼ら一人ひとりの笑顔はちょうどわれわれ8人のボランティアが持っている力強い成果でもあった。私たちは国際的な飢餓や貧困根絶の解決はしなかったけれど、彼らのよりよい生活のために家族や近所の子供たちの手助けをすることはできた。つまりそれは、ハビタット・ミッションが何であるかのすべてについてを物語っているのである。

(この面の記事にブレットさんが撮影した写真を提供して頂きましたことに厚くお礼申し上げます。)

マレーシア・グローバル・ビレッジ〜素晴らしい10日間〜

カチエ・フィーネガン (北海道JETチーム)



今年のゴールデンウィーク中、私はマレーシアでの建築ボランティア活動のためにボルネオ島北西部のクチン市外にある建築サイトに8人のメンバーからなるチームをつれて行った。

私たちのグループは北海道、岩手、熊本、松本、そして大阪から語学のアシスタント教師と東京の衣料会社で働いているメンバーでの構成であった。私たち全員はメールでのコミュニケーションを3〜4ヶ月とったあと初めて空港で出会った。出発前に私がチームメンバーに振り分けた任務のひとつは、短い日記をつけるというものだった。この一つの要求が旅に出るにあたっての皆のモチベーションを高めたのだ。全員の意識が集まりつなげられたものは、単なる観光旅行へ行くことよりも何かをするアクティブな欲望となった。彼らは建築現場での充実した感覚だけでなく、現地の人々の生活への理解、行動、そして彼らが熟考していた問題についての発見を深く掘り下げることを求めた。

個人的に私の日本での経験は、私が出会った人々を通して、住宅の価値を知っていくことを意識させてくれるものだった。私が一緒に働く先生たち、教える学生たち、そして毎週の英語クラスで出会った社会人たちといった仲間なしでは、自分の町での生活を想像するのは難しい。

グループの一人のメンバーがマレーシ



アで行われたハビタット・フォー・ヒューマンティの活動とクチンの周りの貧困地域に隠されたさまざまな問題に特に興味を持った。

彼はしばしばサイトマネージャーや他のハビタット・ボードメンバーたち（ボランティア）と話し、意識を高めるために文献をも学び、未来への貢献のために他の個人個人を連れてきた。

他のあるメンバーはまた特別で、彼女の明るい人柄が湿った気候と疲れる活動の中でチームの精神を引き上げ保つのに役立った。最終日、彼女は友好的な村の子供たちのために3時間近くものゲームを企画してくれたのだ。

特権社会からボランティアに来るということは、ひとつの負目ではあるが、少なくとも私にとっては、弱い世界の異なる部分を見ることとそれを体験することは重要であった。

この問題について何かをするためには、（例えばそれが小さな違いの最小のものであっても）学ぶことと母国での地域活動でこの体験から学んだことを生かすことが重要である。要するに、私は北カリフォルニアのイーストベイ地域でのハビタット・フォー・ヒューマンティのプロジェクトを含めた多くのボランティア活動をした中で、自分の性格を形作り、私の決意への「還元」のためにこれらの素晴らしい経験を役立ててゆきたい。



新プログラム キルギスタン

Trip to Kyrgyzstan

深刻な住宅不足問題



キルギスタンでは、住民は中央アジアに特有の山々と草原との調和の中で暮らしています。しかし都会では、多くのキルギスタン人が1950年代と60年代に建てられた古い家々に苦しんでいます。共産主義時代、政府は全市民に安全な住居地の提供を約束しました。しかし、その約束は実現しませんでした。今日でもまだそれを待ち続けている人がたくさんいます。そのうちの何人かは政府の政策に見切りをつけ、ハビタット・フォー・ヒューマニティ・キルギスタンとともに自分たち自身の家を建てるために立ち上がり、その活動を開始しました。

自然や文化に根ざした伝統的な住宅を建築

ハビタットが建てる家々は、キルギスタン人にとって伝統的な建物となるよう、現地で手に入る自然な資源を使って建築されています。2004年9月、野生のアシ材を利用した革新的な建築計画が始まりました。それはエネルギー効

や首都ビシュケクでのショッピングの前に、乗馬や移動式ユルト（YURT＝下の写真）ハウスでのキャンピング、イシュククル湖の澄んだ水の中での水泳といった多様なレクリエーション活



動やその他のユニークな体験を楽しむことができます。

キルギスタンでのハビタットの存在

ハビタットは無利息、長期間住宅ローンで家を提供する国で唯一の存在です。ハビタットの持つセーブ&ビルドという手法を活用して伝統的な住宅を建築していく計画です。

ビシュケクで2007年春・夏の建築を計画

ハビタット・フォー・ヒューマニティは、この魅力的な国への訪問とエコツーリズム体験を実現するユニークなGVトリップの機会を提供しています。

キルギスタンGV2007への応募方法

キルギスタンGVへの応募方法は、まず2～3人の友人と集まることから始め、それから後ろのページにあるハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンのアドレスに連絡してください。すると直ぐにハビタットの経験豊富なコーディネーターがあなたに最良のGVプランをガイドします。

キルギスタンってどんなところ？



旧ソビエト時代、キルギスタンは貧困なソ連邦のひとつだった。独立後には経済成長が続いたが、キルギスタンの人々はそれでもなお貧乏だった。今日のキルギスタンでは、国内統計委員会によると人口の71%が貧困ラインを下回る収入となっている。この貧困は多くの人々が必要な食料を手でできず、不衛生であり、農村地帯には病気にかかる人が集中している。

キルギスタンの住宅不足は大きな問題である。ソ連の崩壊後、キルギスタンでは主要人口が農村からよりよい生活を求めて都市へ流れるといった変動があった。都市への人口集中が首都ビシュケクの主要な問題であり、多数の家族が一つのアパートや家にひしめきあって住んでいる。多くの家族が12平方メートルかそれ以下の住居を共有しなければならないのだ。また農村でもひどく劣化した住宅に苦しんでいる。風呂や水道のない一つの部屋に3世代の家族が密集していることも珍しくはない。

基本情報

面積	198,999 平方 km
人口	5,400,000
首都	ビシュケク (人口 1,000,000)
大統領	クルマンベク・バキエフ
宗教	イスラム教 75% ロシア正教 20% その他 5%
平均寿命	67.84 歳
国内総生産	1人当たり \$1,600

中央アジアのユニークな文化とヨーロッパの歴史にハビタットと一緒に触れてみよう！

中央アジアとヨーロッパでのハビタットの革新的な活動をもっと見るには・・・

<http://www.habitat.org/eca>

近い将来、キルギスタンチームに続けてハビタット・ジャパンからルーマニアとハンガリーへのGVトリップを実現させよう！



率の良い温床技術を取り入れた保温性断熱材システムを提供するものでした。また、ハビタット・キルギスタンは、政府所有の不完全なアパートを引き継ぎ、漆喰の壁や装飾されたインテリアの修復活動を行うさまざまな機会もボランティアに紹介しています。

キルギスタンGVのレスト&レクリエーション

キルギスタンGVに参加するハビタットのボランティアたちは、建築作業への参加後、観光

レイテ島地滑り被災者のための住宅支援募金キャンペーン



6月25日(日)、ハビタットの学生サポーター組織である「関西JCC」がレイテ島での住宅建設を支援するため、関西地区の5ヶ所で一斉に街頭募金キャンペーンを実施しました。

「関西JCC」は立命館大学、同志社大学、関西大学、京都外語大学、関西学院大学上ヶ原、関西学院大学三田のそれぞれの学校で活動しているハビタットのキャンパスチャプターとキャン

パスクラブで構成されています。

当日はお天気が悪かったにも関わらず、多くのメンバーが協力し、150,649円もの募金を集めてくれました。横断幕の製作など、準備にも力を入れてくれたことをあわせてお伝えします。いただいた寄付は、京都外大西高校キャンパスクラブからの寄付50,000円や他の匿名の方からの寄付と合わせて現地に送り、ドリルなどの工具類(写真)の購入に充てました。なお銀行送金手数料や通信費などの実費はHFHJで引かせていただきました。

寄付していただいた工具類はレイテ島の建築活動で大活躍しました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

“LUNCH WITH HABITAT”でNGOに触れてみよう！

あなたは日本でのNGOの日々の活動について知ってみたいありませんか？ もしかして世界を通じたハビタットの活動をもっと知りたい？ 私たちハビタット日本チームはいつでもそのような訪問者を東中野のオフィスで歓迎し、カジュアルで気さくな環境のなかでボランティアの機会を提供しています。



Lunch with Habitatでは、ゲストのみなさんのためにランチタイムの間に活動ビデオを見たり、元ハビタット参加者の写真つきリポートを読んだり、多様な経験を持つ私たちハビタット・ジャパンのスタッフメンバーの話を聞く時間を設けています。

興味がある方はinfo@HabitatJP.org までご連絡ください。

(なお、上の写真はランチのイメージです。念のため。)

インドネシア中部ジャワ地震被災地への支援

ハビタット・フォー・ヒューマニティとそのパートナーは、今年5月にインドネシア中部ジャワ島南西沖で発生した地震の被災地であるジョグジャカルタにおいてコミュニティ学習プログラムを開始しました。

2日間にわたって行われた耐震性建築の技術を習得するワークショップには、25名を超える地元ホームパートナーが参加し、建築デザインに対する意見交換が行われました。ハビタット・フォー・ヒューマニティ・インドネシアは今後1年以内に1000家族とともに、核となる仮設住居の建設を計画しています。詳しくはハビタット・フォー・ヒューマニティ・アジアパシフィック (<http://www.habitat.org/ap/>) までご照会ください。



Thank you for your continued generosity.

フィリピンの建築工具のための寄付支援のお願い

第一面やこの面でも既報のとおり、フィリピン・レイテ島の建築活動では関西JCCの募金により購入した日本製のグラインダやドリルなど信頼のある工具類が大活躍しました。ハビタット・フィリピンでは引き続き工具類の援助を必要としています。彼らの努力を少しでもサポートする皆様の寄付をどうぞよろしくお願いいたします。

寄付支援は下記の口座をお願いいたします。

郵便振替口座：

口座番号：	00100-2-278431
口座名義：	(特活) HFH ジャパン

銀行口座：

振込先：	三井住友銀行 中野坂上支店 Sumitomo Mitsui Banking Corporation, Nakanosakaue Branch,
口座番号：	普通 4180738
口座名義：	トクビ ハビタット フォー ヒューマニティ ジャパン



ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは地域のニーズに基づいたプログラムや個人参加を通して世界中の貧困住宅の撲滅を目指しています。2006年は100以上の国々で、100万人近くのボランティアが参加しています。私たちのエキサイティングな目的と生活の変化の機会のさらなる情報をご希望の方はぜひ下記までご連絡ください！

Habitat for Humanity Japan

〒164-0003
東京都中野区東中野
1-45-5 日ノ出ビルB101
発行人：塚本 俊也
編集人：茂木 周二
同：中川 ミミ

Tel： 03-5330-5571
Fax： 03-5330-5572
URL： www.HabitatJP.org
Mail： info@HabitatJP.org

